⑬ 弁天山の箱樋

「水がほしい。あの川の水が引けさえしたら。」

山保田の庄屋、笠松左太夫は、小高い丘から、貧しい村を見下ろしながら、さきほどからなんどもつぶやきました。目をつぶると、何日も雨が降らず、干からびた田を力なく見つめている人のすがたがうかんできます。村を出ていく人もありました。なんとか用水をつくろうとして、左太夫は、今日も、あたりの野山を歩きまわっているのです。

「用水を作りたい。けれども、とちゅう、いくつもの難所がある。そう簡単に用水は作れない。村人は工事に協力してくれるだろうか。お金もたくさんかかる。工事のしかたもよく分からない。このわたしにできるだろうか。」

こんなことを思い、ともすれば、左太夫の心はくじけそうになります。

しかし、貧しい村をすくうには、用水を作らなければなりません。

「藩のお役人様に頼んでみよう。藩でも、この山保田でたくさんのお米がとれ

ることには、賛成し、喜んでくれるにちがいない。」

このころ、村で用水工事などをするときには、藩のゆるしをもらわないと、とりかかることができませんでした。左太夫は、何度も用水工事のゆるしを藩に願いでました。藩は、難しい工事が予想されるとして、一時は、左太夫の申し出を受け入れませんでしたが、左太夫の強い願いに心を動かされ、工事を認めました。

いよいよ工事です。村人も左太夫の熱心さに力をかしました。工事は昼も夜も続けられました。道具はのみとつちだけです。くずれやすいところがあります。かたい岩もあります。難しい工事でした。なかでも、久野原(くのはら)から清水の間の弁天山の岩山を砕いて百十七メートルの溝(みぞ)をつけるのには長い期間が費やされました。固い岩を、火で熱くし、その後、水で冷して岩を砕くという方法も取り入れながら、工事を進めました。そして、岩の側面には、箱樋(はことゆ)という木製のとゆを作り、水が流れるようにしました。断崖絶壁(だんがいぜっぺき)での工事は、とても危険なものでした。

――三田の左太夫は、鬼(おに)かよ、

鳥も通れぬ弁天山に、
水を通わす箱樋で。――

と、その工事の様子を人びとは歌いました。

長引く工事に村人たちからは、不平の声も出ましたが、左太夫は、そういう人びとをなだめ、はげましました。

用水路が完成した日、太陽の日にきらきらと光りながら用水を流れる水に、左太夫と村人の目に熱いものがこみあげてきました。

用水路に続いて、左太夫は内芝池（うちしばいけ）などの池の構築（こうちく）にも力を入れました。用水路や池の完成の後、山保田では、新しい田が次つぎと開かれたといわれます。